

共栄学園高等学校

ボランティア部

高校生ボランティア・アワード2020

「SDGsの視点で楽しく募金活動・ 幸せの循環を目指す」

活動概要:「知ることが第一歩」をスローガンに、世界の貧困地域で起きている事象を伝える方法を考え、文化祭を利用して啓蒙活動を行った。

NPO法人ラリグラスジャパンに協力いただき、フェアトレード商品の委託販売を行っている。フェアトレード商品の中には、人身売買被害者がホスピスで作っているビーズ商品などがあり、文化祭で自分の作品が売れることで金銭だけでなく仕事がある喜び・生きがい等の精神面の被害者支援につながっており、本校生徒たちも女性たちのストーリーを知ることで実際に友人を支援しているような身近な気持ちになれる効果があった。生徒が作品一つ一つの背景を説明することで、来校者や在校生に身近な支援として「知って」もらえるきっかけになった。

また、ゲームにお金をつぎ込んでいた学生の性質に着目し、ガチャガチャゲームで遊びながら、寄付金を回収する方法をとった。段ボールとペットボトルで手作りしたガチャガチャに興味を持ってもらうことができ、そこから活動を「知って」貰うことができた。中には「僕の子の100円があの子(貧困地域に住む子ども)たちのご飯になるでしょ」との感想が聞けた。寄付金はNPO法人ラリグラスジャパンを通じてネパールの人身売買被害者支援、特に女子の啓蒙教育に寄付している。ガチャガチャの余った景品はCECJapan Networkを通じて、セブ島のスラム街に住む子どもたちに配布している。

手作りミサンガは生徒がひとつづつ貧困地域への思いを込めて作成した。購入した生徒も身につけることで活動を身近に感じてくれた。気持ちをつなぐ活動になった。

そのほか、販売するときの紙袋に貧困地域への募金や物資の寄付依頼を印刷し、啓蒙に努めた。最初の年には全く集まらなかったが、3年目には段ボール2箱分の支援物資を集めることができた。活動を続けること、情報発信を続けることで、支援の輪「幸せの循環」が広がってきているように感じている。

今年度は新型コロナウイルスの影響で文化祭も実施されなかったが、支援の手を止めず今後も継続して行っていきたい。ガチャガチャのような体験型の寄付は、お金を入れて終わりではなく記憶に残りやすい方法であると考えられるため、ガチャガチャだけでなく新しいものを考えていく予定である。



「知ることが支援の第一歩」 学生にできることは何だろう？

お金はないけれど、体力と時間には余裕がある、そんな学生が考えた支援は「ミサンガを売る」でした。貧困に苦しむ子供の存在を知り、何かしてあげたいと思いつつも何からしていいかわからない、そんな学生の私たちが最初に思いついたことは、あまり奇抜でもなく、ありきたりの方法でした。

勉強の合間を縫って、数百本のミサンガを編みました。ミサンガは令和の時代になっても学生が愛するアイテムであり、人気があります。また、思いを込めて編むという行為自体に、意味があるように思えました。

いつも身につけるアイテムだからこそ、見るたびにボランティア部のことを思い出してくれるのではないかと期待して、説明をしながらたくさんの人に売りました。商品を渡すときの紙袋に、活動内容を印刷し、啓蒙につながるように工夫しました。結果、初年度はミサンガだけで8万円を超える収益を得ました。昨年まで3年続けて10万円近い金額を毎年寄付しています。※今年度は新型コロナのため文化祭がありませんでした。

学生だからこそ、知ってほしい。お金をかけなくてもできる支援がある、その思いで活動しました。大それたことが出来なくても続けることで毎年通ってくれるお客さんが出来ました。金額的には焼け石に水ですが「知ってもらえた」ことは大成功だと思っています。

次年度からは商品にガチャガチャが加わりました。色んな年代に活用してもらうことができ、より一層啓蒙活動が充実しました。幼稚園生や小中学生の利用者が増えたことは嬉しかったです。

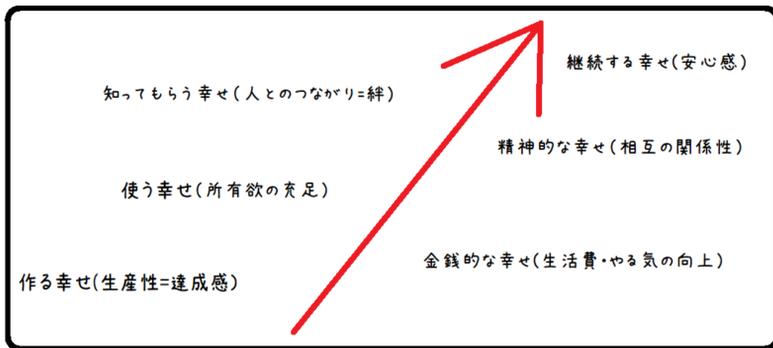
「絆」

人を救うのは他者との絆だと考えました。アメリカのNCIで行われているナバホ族のアルコール依存症の治療でも、最も効果があったのは古い部族の苗字を思い出し、一人ではないと人とのつながりを再認識できたことだと言われています。支援しているネパールの子どもたちも、何よりもうれしいことは遠く離れた日本で自分たちのことを忘れずに毎年思ってくれていることだと話してくれました。生きることに必要なものは「お金」だと思いますが、生きる希望に必要なものは「人とのつながり(絆)」なのではないかと思いました。

フェアトレード商品の販売は、経済的に人と人をつなぐだけでなく、仕事をつないだり、思いをつないだり、とても有効だと思いました。しかしながら、輸送費等が上乗せされるためとても高額でもあり、本校の文化祭で販売するには学生向けの金額ではありませんでした。そこで、フェアトレード商品と並行して、「絆」を意識したミサンガを作成・販売することにしました。

編むという行為は気持ちを込める作業でもあり、私たちの思いがいろんな人に届くといふと考えると選びました。けれど、初年度でたくさん売ってしまったので次年度はそれほど売れませんでした。そこで、新しく考えた方法がガチャガチャです。一見絆とは程遠い気がしましたが、お金を稼げるという点でもとても有効でした。ミサンガを売ったときよりも景品にお金がかかりコスパは良くなかったですが、集客はとてもよく、幅広い年齢層に受け入れてもらえました。その意味で活動を知ってもらうというスローガンの目標は達成されました。また、商品自体には「絆」の意味がなくなってしまったのですが、活動を継続したという点で「絆」は残っていました。活動自体が絆になり、何を売るかは問題ではないのかもしれないと思うようになりました。さらに、ガチャガチャの景品として購入した商品は、セブ島のスラム街で配布できるという利点もありました。セブ島のスラム街には数百人の子どもたちが生活しており、食べ物自体が足りない状況で、遊具まで手が回っていません。ガチャガチャにいれるような小型のおもちゃは運搬にも負担がなく、みんな喜んでくれました。初年度はネパールだけだった支援先がもう一つ増え、セブ島のスラム街とも絆を結べたことは嬉しい誤算でした。その年から、不用品の回収も行い、着なくなった洋服等を寄付する活動も始めました。商品を渡す紙袋に募集を記載したところ、学校外の方からもたくさん寄付が届きました。

私たちは学生であり、他にすべきことも多く、すべての時間や労力、お金をかけて活動することはできません。それでも、1年に1回忘れずに活動することで支援は続けられるのだと感じています。大きなお金を動かしたり、何かを変えるのは大人や社会がした方が早いと思います。けれど、同じ年代の人間として、彼らと心を通わせることは私たちの方が適しているのではないのでしょうか。初めは支援団体の方に「支援は金だ」と言われた印象から、お金を稼がないと！と躍起になっていました。けれど、現地の子どもたちはお金よりも自分を覚えて活動してくれる方が嬉しいと言っていました。もちろん、お金は必要ですし、最低限の生活の確保がなければそんなことは言えないと思いますが、私たちの活動の大きなモチベーションになったことは間違いありません。支援する側も支援される側から気持ちももらって、お互いに「絆」を感じることができたからこそ、活動が続いていくのだと思います。



「継続する活動」

活動を始めるときに、1回で終わりにしてはいけないと考えました。高校生活は3年で、私たちが学内でできる回数は決まっているけれど、支援を待つ人たちの生活はずっと続いているのです。上述の通り、継続した活動が「絆」になるという結論も得たので、私たちの勝手な理由で絆を断ち切らないように、後輩に引継ぎ、継続して行って欲しいと思っています。

誰かの言葉で「人が死ぬときは世間から忘れられた時だ」と聞いたことがあります。生物学的な死は心停止(脳死) かもしれませんが、社会的な死は忘れられることなのだと思います。だからこそ、私たちの小さな活動でも続けていく意義があるのではないのでしょうか。寄付している額なんて本当に摂るに足りない額です。ですから、金額に意味はないと思います。私たちの活動の最大の存在意義は「継続すること」です。学校の中で貧困地域の支援が社会的な死を迎えないように、これからも活動を継続したいです。そして、支援先の笑顔や頂いた言葉で私たちが幸せになったように、たくさんの幸せを循環してもらい、お互いに幸せが巡り巡る活動になっていくことを願っています。私たち支援する側も相手から受け取ることができないと支援は続いていかないとと思うからです。相互作用を生む活動を目指して、背伸びはせず身の丈に合った内容の活動に継続的に取り組んでいきたいと思っています。すごいことがしたいのではなく、「絆」を絶やさないために。



活動団体プロフィール

ボランティア部は部員だけでなく、活動ごとにその都度参加者を募って活動しています。部員になるには継続的なボランティア活動への参加と、今回発表させていただいた文化祭への参加が義務になっています。掛け持ちで入部している生徒も多く、自分のできる範囲で無理のない活動を心掛けています。